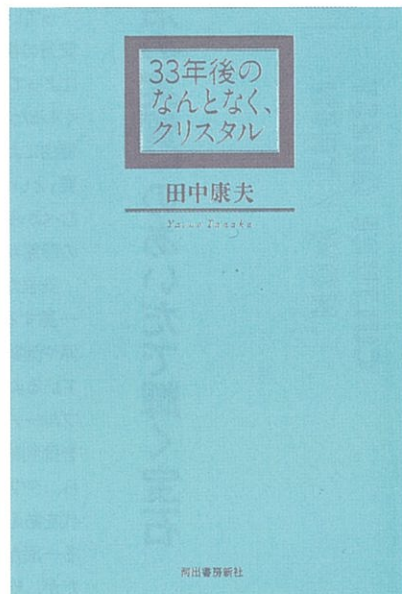


小説の体裁を利用した政治的マニフェスト

『33年後の
なんとなく、クリスタル』
AUTHOR_田中康夫
PUBLISHER_河出書房新社



力じゃない』って言葉。私、そう信
じたい。たとえ先が見えなくなつて、
ゆっくりと手探りで、前に進めると
思うの」。

かつて「クリスタル」に映った世
の中は今、彼女たちにどう見えるの
か。小説の終盤には「黄昏」とい
う言葉が登場する。しかし、それ
は沈みゆく社会を暗示しているわけ
ではない。再び由利の言葉を聞こう。
「黄昏時って案外、好きよ。だ
って、夕焼けの名残りの赤みって、
どこなく夜明けの感じと似ている
でしょ」。

今作にも付記された約70ページ
にわたる巻末の「註」は、ヤスオ
＝康夫の政治的マニフェストとも読
める。気軽に小説を読もうと手に取
った読者たちは、今度こそ彼の真
意に気づけるか。①

text by Eiji Kobayashi
小林英治 = 文

1974年生まれ。編集者／ライター。
CINRA、ハニカム、『IMA』などの媒体
で作家や映画監督、芸術家のインタビ
ューを行うほか、書籍編集も手がける。

1 980年の秋に発表された
『なんとなく、クリスタル』
は、大学に通いながらモデル事務
所にも所属する由利を主人公に、
高度経済成長を経てその後のバブル
経済に向かいゆく当時の“豊かな”
日本社会の「今の気分」を、
ブランド品やAORの楽曲、流行の
飲食店といった固有名詞や風俗を
織り交ぜて肯定的に描いた小説と
みなされた。翌年単行本が発売さ
れるや、100万部を超えるベストセ
ラーとなったが、この作品を語るう
えて何より話題になったのが、小
説の本文は右ページだけにあり、
左ページには計442に及ぶ膨大な
註が施されていたということだ。それ
は正確には「NOTES」と題され、
固有名詞などの補足説明にとどま
らず、著者の独断に満ちた社会批
評となっており、ある意味「軽薄」
で「中身の無い」と評された本文
より評価された。しかし、最後に掲
載された日本の人口減少と高齢化
を示す予測データには誰も注意を
払わず、当時その真意はほとんど
理解されなかったという。

その『なんクリ』から1/3世紀
を経て、2013年の東京を舞台にし
た続編、『33年後のなんとなく、ク
リスタル』が発売された。今作で
はかつての小説の登場人物のモデ
ルとなった人々が、実際に年齢を
重ねて50代となって登場する。し
かも、物語の語り手となる「僕＝
ヤスオ」は、著者である田中康夫
を思わせる人物というからヒネリが
きいている。

ヤスオは、“記憶の円盤”と呼ぶ
脳内データベースを参照しつつ、
再会した彼女たちとお互いが生きて
きた33年間を語り合う。前作では、
ミュージシャンと同棲し、「クリスタ
ルなのよ、きっと生活が。なにも悩
みなんて、ありやしないし……」と
呟っていた由利も、大人の女性に
成長。卒業後に就職したフランス
の化粧品会社の広報から、ロンド

ンの大学院への私費留学を経て独
立し、現在はPRの仕事をしなが
ら社会貢献と経済成長の両立を模索
している。

ほかの登場人物もそれぞれのキ
ャリアと人生を重ねている。会話の
話題も、ブランド品や食への変わ
らぬ嗜好はありつつも、介護や都
会における限界集落の問題など、
生活者として感じる日本社会への
不安や政治への不満が飛び出し、
政治家としてさまざまな課題に取り
組んできたヤスオも自らの経験を話
す。前作で“本文では”語られな
かった政治的・社会的な 이슈が
多数盛り込まれているのだ。

小説では、再び近くなった由
利との会話に見え隠れするヤスオ
の欲望の行方に読む者の関心を引
き寄せつつ、実は、著者田中康夫
が本当に訴えたいのは、各々が社
会とコミットして、できる範囲で
より良い社会の実現に向けて行動し、
未来への希望をもとうというメッセ
ージだ。仕事で直面する現実にも
がきながらも由利は言う。「ヤスオ
も知ってるでしょ。『微力だけど無

READ ALSO 1981



『なんとなく、クリスタル』
AUTHOR_田中康夫
PUBLISHER_河出書房新社
1981 / 2013

FEELING CHRYSTAL
IN 33 YEARS

by YASUO TANAKA